質問

学校建設工事の遅れによる湯沢学園開校時の対応は

南雲　正

質問 子どもたちの安全安心を最優先に

問 副町長から、校舎棟は平成26年3月竣工するが、児童の昇降口、プール、新体育館のある交流アリーナ棟は9月の供用開始になるという報告があった。関係者から工事の遅れを心配する声がある中、町長、教育長から校舎棟、交流アリーナ棟は湯沢学園開校には間に合わせるという約束を聞き、安心していたが、この時期になっての突然の発表に困惑した。

その後の調査で工事施工業者、設計管理者の意見も異なり、異例の教育委員会からの申し入れ等もあり、校舎棟すら本当に間に合うのか心配されるが、発注者としての真意と見通しを伺いたい。

校舎棟のみの完成で4月から小学校を統合し、小中一貫校の開校を進めるようであるが、紛れもなく周囲は工事現場である。学校に通う子どもたちと保護者に安心安全な教育環境を提供するためには交流アリーナ棟が完成し、子どもたちに安全な教育環境が確保されるまで、統合小学校は湯沢小学校の校舎を使い、中学校は現在の校舎を使うことが望ましいと思うが、町長の見解を伺う。

答 厳しい工期の中、4月に開校できるよう校舎棟の工事を優先させ、苦渋の決断として交流アリーナ棟の引き渡しを遅らせた。3月の小中校舎棟の引渡しは絶対条件であり、4月開校を確信している。一刻も早く耐震化された校舎で学校活動を開始し、児童生徒の安全確保を図る必要がある。

旧湯沢小学校校舎を短期間使用する場合、引越しの回数が増えるなど教職員、児童の負担が大きくなる上、スクールバスの変更、老朽化したプールの補修、教室確保など膨大な手配が必要となり、実質的に不可能と考える。

質問 スキー観光の平日対策としてシニア層の誘客強化を

問 今シーズンの町内スキー場の入込状況は、何とか東日本大震災前を1・5%上回ることとなった。早めの降雪、好天に恵まれ、湯沢町スキー伝承100周年をキーワードに展開されたスキー観光の活性化やファミリー向けの各スキー場の多彩なサービス等の展開の成果である。

しかしながら、ファミリー層をターゲットにしたため休日にスキー客が殺到、平日のスキー場は閑散としていた。「楽しく滑って健康に」をテーマに、スキーがシニア層の健康に必要であるという情報を発信し、平日に動けるシニア層をターゲットにした誘客活動に力を入れることが必要ではないか。スキー観光復活に向けた町長の考えを伺いたい。

答 団塊の世代といわれる人たちは比較的余裕があると同時に健康にも大きな関心を持っていて、健康は四季を通じたキーワードと考えている。限られた休日に多くの客が集中するよりも、平日に採算の合う集客を目指す事は収益を増やすだけではなく、安定した雇用の場の確保に繋がることになるので、その波及効果は大きい。

町行政、観光協会、索道事業者や宿泊業等の役割を町観光協会企画宣伝委員会の中で再確認した上で、町の意向として強く伝える。

質問 「童画の町ゆざわ」を町の文化振興の指針として、童画美術館建設の再考を

問 日本童画の父川上四郎永住の地「童画の町ゆざわ」の具現化を目指し、美術館建設基金を活用した拠点施設「童画美術館」の建設により、駅東側の活性化を図りたいという地域の声に対し、議会は全員賛成でこの請願を採択した経緯がある。

近年、童画の世界が全国的に脚光を浴び、状況は以前と変わって来ている。童画が子どもたちの教育の中で、又子どもたちを育てる中でどういう影響が出て、効果があるのかという問題を町づくりの観点から見直さねばならない時期にきている。

この文化の原点である川上四郎作品、全国童画展作品を活用して将来に向けて拠点施設としての童画美術館建設をもう一度考え直す必要があると思うが、町長の考えを伺いたい。

答 歴史民族資料館のバリアフリー化に合わせ、童画展示のスペースを確保して童画美術館とすることを指示してきたが、全国童画展の審査員である豊口先生の力沿いを得て、川上四郎作品、全国童画展作品を活用する新たな事業として来春フランス・パリで展覧会を計画している。

湯沢の童画文化を世界に発信するチャンスが生まれ、状況も変化しているので、温泉街の雪国館とのコラボを含めて検討させていただく。